

## 過去を模倣する未来：書物の来しかた, 書物の行くすえ

著者	澤入 要仁
雑誌名	国際文化研究科論集
巻	9
ページ	27-41
発行年	2001-12-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/34495">http://hdl.handle.net/10097/34495</a>

過去を模倣する未来  
——書物の来しかた、書物の行くすえ——  
The Future Simulating the Past:  
The Fate of the Book as Seen from Its History

澤 入 要 仁

はじめに

夏目漱石の『吾輩は猫である』には書物に関する記述がいくつかあって興味ぶかい。たとえば苦沙彌先生の妻が、主人から聞いた本に関する話を迷亭に語る部分がある。ローマ王に女が本を9冊、売りにきた。法外な値段である。王は値引きを要求すると、女は即座に3冊を火中に投じてしまう。王は驚いたが、少しは安くなったかと思い、ふたたび価格を問う。女は一銭もまけない。「それは乱暴だ」と攻めよるや、女はまた3冊を燃やしてしまう。残りの3冊が灰燼に帰するのをおそれた王は、とうとう最初の9冊の言値で「焚け余りの3冊」を買いとらざるをえなくなる、という話だ。

もちろんこれは書物が貴重であった時代のことである。女はその稀少価値を知っていたから、無茶とも思えるほど強気の売りかたをした。ローマ王といえども、本の貴重さとそれを利用した女の知恵にかなわなかったのである。じっさい苦沙彌先生も、妻があまりに「書籍の価値」や「書物の難有味」<sup>ありがたみ</sup>を解さないの、この話を教えたのだった。<sup>(1)</sup>

しかし現在はどうか。このローマ王の時代以来、書物には大きな変化があった。まず15世紀中頃、ヨハン・グーテンベルクによる活版印刷術の発明があった。18世紀末には、書物が飛躍的に普及し、ロルフ・エンゲルジングのいう読書革命——集中的読書から拡散的読書への変化——が起こった。<sup>(2)</sup>そして1935年にイギリスでペンギン・ブックスが、翌39年にアメリカでポケット・ブックスが創刊され、小型で安価な本が大量に流通するいわゆるペーパーバック革命が起きた。もはやローマ時代のような貴重性を現在の本に求めることはとうていできない。

じじつ『出版年鑑』2001年版によれば、2000年度の日本の新刊書籍は65,065点もあった。前年より3.9%も増加したことになる。出版不況がいわれるなか、書籍の総発行部数は前年より3.7%減少したが、それでも14億1986万部にのぼった。ただし、それらがすべて売れたわけではない。返品率が高く、『全国書店新聞』によれば2000年度の返品率は39.4%もある。すなわち、約5億5900万部が返品され、倉庫に送りかえされたまま眠っているか、処分されたことになる。もはや書物の貴重性はローマ時代のそれと比べるべくもない。<sup>(3)</sup>

2001年度上半期もこの状況は変わっていないようだ。『全国書店新聞』によれば、2001年度の上半期には、『チーズはどこへ消えた?』が300万部のベストセラーになったが、平均すると一点あたりの発行部数は伸びず、新刊刊行によって売上げ減を補おうと、新刊点数がさらに3.2%増えた。返品率もあいかわらず高い。わずかの改善が見られたが、それでも37.1%にのぼっている。<sup>(4)</sup> いまや日本の出版界は、売れない本を次から次に印刷し、そのうちの多くを次から次に回収しているのだ。本に限っていえば、もはや大量生産、大量消費の時代ではない。大量生産、大量在庫、大量処分の時代なのである。

近年、書物というこの古いメディアをめぐる状況が騒がしいが、その大きな原因はこのような出版部数の大きな変化にある。しかし問題はそれだけではない。書物は、少なくとも執筆、編集、出版、流通、そして読書というさまざまなプロセスを経る<sup>アーティファクト</sup>産物であるが、そのなかで書物の流通という側面も大きな変化をみせているのだ。

まず1980年代、アメリカでメガ書店といわれる大型書店が各地に作られた。バーンズ・アンド・ノーブルやボダーズという大型書店が全米各地に出現したのである。<sup>(5)</sup> さらに1990年代になると、オンライン書店というインターネット上の書店が注目を浴びた。たとえば1995年に設立されたアマゾン・ドット・コムというアメリカのオンライン書店は、電子取引やドットコム・ビジネスと呼ばれる新しい商業形態のリーダーとして、いちやく時代の寵児になった。世界の多くの企業がアマゾン・ドット・コムに範を求め、書籍のみならず、あらゆる商品の小売業がその動向を見まもった。

この書物の流通革新の波は日本にも到達した。1998年8月、そのアマゾン・ドット・コムが、日本に進出するため日本の書籍宅配の草分けであるブックサービス社に買収を申しでたのである。結局、ブックサービス社が「つぶねた」が、この買収計画によって日本の書店業界や取次業界が震えあがったことは想像に難くない。<sup>(6)</sup> アマゾン・ドット・コムの日本進出は時間の問題だった。

それから2年たった2000年9月、アマゾン・ドット・コムは取次の大阪屋と手を組むことに成功し、11月、いよいよ日本のオンライン書店を開設した。和書110万点、洋書60万点を千葉県市川市に在庫し、洋書は最大で3割引、和書は、再販制のため割引できなかったが送料無料サービスを長期的におこなって、これまでの通信販売にない割安感を強調した。2001年9月現在、220万タイトル以上の和書、洋書、CD、DVD、ビデオを取り扱っているという。

もちろん日本の書籍流通業界が指をくわえて傍観していたわけではない。1995年10月、アマゾン・ドット・コムの本国オープンよりわずか3ヶ月遅れで、「本屋でござ〜る」というオンライン書店が日本に登場していた。その2ヶ月後の12月には、日本を代表する老舗書店の丸善が「丸善インターネットショッピング」というオンライン書店を開設した。同じく老舗書店の紀伊國屋書店は出してくれたが、1996年10月、オンライン書店「ブックウェブ」を開店し、本の表紙の画像を多用するなどインターフェイスを工夫することによって売上げを伸ばした。<sup>(7)</sup>

書物の世界の変化は、このような出版や流通という側面の変化だけではない。じつは書物そのも

のも変化しようとしているのだ。たとえば、2000年9月、インターネット上に新しい本を売るオンライン書店「電子文庫パブリ」がオープンした。これは、それまでのオンライン書店と大きく異なり、「電子文庫」と呼ばれる、書物の電子データをインターネットを介して顧客のコンピュータに直接伝送する書店である。本のデータを受けとった顧客は、そのデータをコンピュータの画面に映しだすか、あるいは、プリンタで印刷するかによって、はじめてそのテキストを読むことができる。支払いはもちろんクレジットカードが使われるので、この書店と顧客のあいだには、これまでのようなお金と商品とのやりとりはなく、交換されるものは、クレジットカードのデータと商品のデータにすぎない。つまり、この書店は、従来のようなモノとしての書物やCD-ROM化された書物を売る書店ではなく、書物の電子データという、肌ざわりも重さも匂いもない、いわば実体のない書物売る書店なのである。

すでにのべたように、書物の出版や流通という側面が驚くべき変化を経験しているが、書物の形態という側面もこのような大きな変化を遂げようとしているのであろうか。これからの書物は、電子データのみからなる、いわゆる電子本になるのだろうか。これまでのような書物は消えてなくなるのだろうか。

序論が長くなってしまったが、本稿では活字文化の歴史をたどりながら、このような活字文化の未来を予想したい。もちろん、書物の未来に関しては多くの研究がある。たとえばスヴェン・バーカーツは、「直線的」「私的」「静的」な活字読書が、電子技術の発達によって「横方向」的で「公的」「受動的」なものに変化してしまうと警告した。<sup>(8)</sup>すでに大学の名誉教授であって、けっして若くないリチャード・A・ランハムは、電子テキストが、教育を「民主化」し、「創造力」を刺激して芸術文化を「充足する」と期待した。<sup>(9)</sup>経験をつんだ編集者として、まずDTPに惹かれ、さらに電子本に興味をいだいた津野海太郎は、簡易出版の極致としての電子本のもつ民主性に最大の関心をよせている。<sup>(10)</sup>

けれども本稿の主張はこれらと傾向を異にする。本稿では、まず活字文化の歴史をかえりみて、書物をめぐる多くの技術革新が、その制作過程を変えるために使われ、書物そのものを変えるためには使われなかったことを明らかにし、つづけて、現在の電子本が同様に旧来の書物の形態を維持しようとしている現状を指摘する。すなわち、それぞれの時代の新しい技術が過去を模倣するために使われてきたように、現在の電子本も旧来の書物を模倣していることを示す。そして、電子本が将来、過去の頸木くびきを離れるときになってはじめて、旧来の書物がなくなるだろう、それまでは、電子本は伝統的書物の補完物でしかないだろう、という展望を提示したい。

## 写本から初期印刊本へ

はじめに、活版印刷術が発明される前後の時代をかえりみて、そのさい如何に未来が過去を模倣したかを明らかにしよう。

ヨハン・グーテンベルクが活版印刷術を発明したのは、15世紀の中頃、1450年頃だといわれているが、その15世紀に印刷された初期印刊本はインキュナビュラ（揺籃期本）と呼ばれている。そのもっとも有名なものはグーテンベルクが作りはじめ、借金の代償としてヨハン・フストにとられたのち、フストがペーター・シェッファと完成させた、いわゆる42行聖書（グーテンベルク聖書）だ。この本の印刷は全部墨刷でおこなわれ、赤文字や飾り頭文字の部分はあとから手書きで加えられた。余白の装飾ももちろん手書きである。

この聖書は約180部印刷されたといわれているが、当時、印刷本としてではなく、写本として売られた。じっさいこの本が写本であるのか印刷本であるのかを見わけるのは難しく、1812年になっても写本として分類されていた例がある。<sup>(11)</sup> というのは、写本と同じように豪華な装飾が施されていて、装飾から写本か印刷本かを判別することはできなかつただけでなく、多くの筆写生が活字のような整然とした文字を書くことができたため、本文からも写本なのか印刷本なのかを区別することが難しかったからである。

このように15世紀の活版印刷本は写本とそっくり変わらないものだった。活版印刷術が発明されたからといって、書物そのものが新しくなったわけではないのである。<sup>(12)</sup> これはなぜか。いろいろな説がある。たとえば、購入者の目をだまして大量生産の印刷本を貴重な写本として売るため、あるいは、職を失うことを恐れはじめた筆写生たちの目をだまして彼らの反発をさけるためなど、さまざまな考えかたがある。けれども、そのような理由では、筆写生たちも印刷本を手本に筆写することがあった、という事実を説明できない。カート・ファーディナド・ビューラーが示したように、印刷本が写本を模倣しただけでなく、じつは写本も印刷本を模倣していたのだ。<sup>(13)</sup>

したがって、活版印刷術という新しい技術が書物を変えなかったのは、書物というものが写本のような書物しか考えられなかったからではないだろうか。グーテンベルクらは書物製作のプロセスを変えようとしたのであって、その書物自身を変えようとしたのではなかったからではないだろうか。

もちろん活版印刷術によって大量印刷が可能になった。書物をいわばマスメディアにしたのだ。さらにエリザベス・L・アイゼンステインが示したように、活版印刷術なくして、ルネッサンスや宗教革命、科学技術の発展は不可能だった。<sup>(14)</sup> 本稿はそのような影響を否定しようとしているのではない。そうではなく、活版印刷術が書物そのものを変えたわけではない、といたいのだ。活版印刷術は過去の写本を模倣して印刷本を作った。活版印刷術という新しい技術は、新しいモノをすぐに生みだしたのではなかったのである。

## 活版印刷から平版印刷へ

次に、活版印刷と平版印刷<sup>へいばん</sup>について考えてみよう。平版印刷とは、活版のような凸版印刷でもなく、銅版のような凹版印刷でもなく、文字どおり平らな版に、インクがのる部分とのらない部分を化学的に作って印刷する技術である。これは、もともと1797年にドイツのアーロイス・ゼーネフェルダが発明した石版印刷<sup>せきばん</sup>（リトグラフ、リソグラフ）に由来する。ゼーネフェルダは1818年、『石版印刷術の完全学習書』を著したが、ここには多色刷りなどのあらゆる技法が述べられていて、すでに石版印刷術が成熟されていたことがわかる。ヘルムート・プレッサーのいうように、ゼーネフェルダによる石版印刷の迅速な完成とその効用は、グーテンベルクの発明に比肩するといってもいいだろう。<sup>(15)</sup> なお、石版印刷はあたえられた原本を忠実に再現するので、文字印刷よりも絵の印刷に使われ、19世紀の挿絵や装画の印刷はまたたくまに石版印刷の独擅場になった。ドラクロワがゲーテの『ファウスト』のために1828年に制作した石版画はとくに有名である。

けれども本稿でもっとも興味をひかれるのは、ゼーネフェルダが、音符入りの自分の歌曲を安価に出版しようとして石版印刷術を開発した、ということである。当時の書物の形態を変えようとしたわけではない。ここでも、新しい技術が過去を踏襲するために使われているのである。

石版印刷からはじまった平版印刷は、1904年、アメリカのアイラ・ワシントン・ルーベルが発明したオフセット印刷によって、さらに進化した。これは版と紙のあいだに特殊なゴムを巻いた円筒を追加し、版からゴム、ゴムから紙へとインクを移す印刷方法である。このオフセット印刷は、カラー印刷が容易で、しかも紙以外のものにも印刷できるので、第二次大戦後、急速に普及した。日本では1972年にオフセット印刷による生産額がはじめて活版印刷のそれを越え、以後、その差が広がっていった。オフセットという言葉は、いったん版からゴムにインクを離し（オフ）、そののちゴムから紙にインクをつける（セット）ことに由来しているという。<sup>(16)</sup>

たしかにオフセット印刷によって、大量生産が可能になり、安価で美しいカラー印刷が可能になった。けれども、オフセット印刷も、書物の制作過程の技術革新であった。書物の形態やその機能を革新するものではなかったのである。

このオフセット印刷と並行して発達した技術が写真植字、写植だ。活字は重く不便なうえ、異なった書体の活字セットだけでなく、同じ書体でも大きさの異なる活字をそろえなければならなかった。そこで、レンズを使って、文字像を拡大縮小させながら印画紙に投影させることによって版を作るようにしたのが写植である。こうして、ひとつの文字盤から複数のサイズの印字ができるようになり、それぞれのサイズの書体を用意する必要がなくなった。

写植の技術は19世紀末には考案され、実用化のための実験が繰り返されていたが、欧米で普及するようになったのは第二次大戦後だった。しかるに日本では、すでに1924年に石井茂吉と森沢信夫が実用化に成功し、戦前から少しずつ使われていた。日本では活字の数が多かったため写植技術への関心が強く、さらに、和文では欧文のような行末のジャスティフィケーションが不要のため、

機構が単純ですんだからである。

しかし、初期の手動写植は、校正に向いていないという欠点があった。活版なら、一部の活字を入れかえるだけで校正できるが、手動写植では、すでに組んだ印画紙に切り張りをしなければ校正できなかったのである。また、初期の写植は文字の数が限られていた。活字ならば、変わった文字も現場で作ってしまうことができたが、写植の場合は現場で文字盤を作ることが困難だったからである。

けれども、写植が進歩して、1960年代以降、電算写植の時代になると、校正も容易になり、珍しい異体字も用意されるようになった。「ホットメタルからコールドタイプへ」という合い言葉とともに、写植が急速に普及したのも電算写植が実用的になってからのことである。<sup>(17)</sup> 現在では、電算写植が一段とデジタル化され、写真ではなく、レーザー光線を応用したイメージセッタと呼ばれる機械で印刷用のフィルムが作られている。

このような写植技術によって、なにが変わったのだろうか。まず第一に、写植によって、新しいデザインの書体が増えた。活字の時代には新しい書体の活字セットを増やすことは大きな負担であったが、それが容易になったのだ。その結果、特に雑誌や広告などの印刷に、無数のデザインの書体が使われるようになった。第二に、印字の質が変わった。活版印刷の印字は印圧で凹んでいて、いわば重厚だった。しかも活版印刷の印字には、文字の周囲にインキが押しだされて濃くなったマージナル・ゾーンと呼ばれる部分があって、文字の輪郭が鮮明にみえたものだったが、写植の印字は、平面的でいわばのっぺらぼうにもみえる。

けれども、写植は活版印刷術を軽量化し機動的にしようとしたものであって、書物を変えようとしたものではなかったし、じっさい書物を変えることはなかった。この事実はあらためて指摘するまでもない。その点では、写植印刷術の発明は活版印刷術の発明と同じなのである。

## タイプライターから DTP へ

次に、タイプライター、タイプライティングという技術について考えてみよう。もちろんタイプライターは、印刷に取ってかわろうとした技術ではない。印刷のような大量に生産することが目的ではなく、手書きに代わるものとして、能率の向上と可読性の向上とをねらって考案されたものである。じっさいタイプライターで書かれた文書は、手書き原稿 manuscript に対して typescript と呼ばれているように、一種の原稿にすぎない。フリードリッヒ・キトラも『グラモフォン・フィルム・タイプライター』のなかでタイプライターを論じたとき、書く道具としてのタイプライターに注目しているようだ。<sup>(18)</sup>

けれども、最初の実用的タイプライターが1874年、レミントン社から発売されてから、近年、コンピュータによるワード・プロセッサに取ってかわられるまでの歴史を概観してみると、タイプライティングは印刷術、とくにその組版術を模倣してきたことがよくわかる。たとえば、20世紀初

頭から、字体の交換が可能なタイプライターが作られるようになった。手書きの代わりならば、複数の字体は必要ないはずだ。このような改良は、タイプライターが印刷のようになりたいたいという願望をもっていたことの表れだと思われる。事実タイプライターは、簡易印刷の版下としても使われてきた。

タイプライターについてとくにおもしろく思われるのは、組版のルールである。英文の学術書・学術論文の組版には、これまで権威であったオックスフォード大学の *Hart's Rules for Composition and Readers* と、現在もっとも広く使われているシカゴ大学の *The Chicago Manual of Style* があるが、これらはいずれも活版あるいは電算写植のための組版ルールである。しかしアメリカ近代語学会 (MLA) という学会が発行しているルール集は、タイプライターで書くことを前提にした、あるいはタイプライターでも作ることでできる組版のルールなのだ。たとえば、注の組みかたがタイプライターでも可能な組みかたになっている。このこともタイプライターが印刷術をめざしていた状況を反映している証拠のひとつといえそうだ。<sup>(19)</sup>

次に、デスクトップ・パブリッシング (DTP) と呼ばれるコンピュータを使った印刷について考察してみよう。すでに示したように、現在、写植機もコンピュータ化されているが、ここではそのような専門業務用のデジタル印刷のことではなく、パーソナル・コンピュータやワーク・ステーションと呼ばれる汎用コンピュータを使った簡易印刷のことを検討してみたい。

まず、DTP によく使われているアップル社のマッキントッシュ・コンピュータを考えてみよう。このコンピュータは、使いやすさを考えて設計されているといわれているが、その使いやすさというのは、既存のもののたとえや既存のもののアナロジーを使うことによって実現されている。たとえば、コンピュータの画面は「デスクトップ」、すなわち机のうえのたとえだ。そこには「フォルダー」や「ゴミ箱」があって、そのフォルダーのなかに「書類」があり、さらに重層的に「フォルダー」がある。ソフトウェア・プログラムを使ってその書類に絵を描くときも、「筆」や「消しゴム」を用いて書きいれる。

もう明らかだろう。これらの使いやすさを考えたアイデアというのは、すべて既存のもの、伝統的なもののたとえなのである。コンピュータという未来的なモノが過去の日用品のイメージを借りているのだ。過去を模倣しているのである。

もちろん、インターフェイスと呼ばれるこれらの対話装置の開発には、科学者たちの創意工夫があった。操作の難しい計算機を扱いやすいように改善する努力が続けられたのである。そのような工夫がなければ、現在のようなパーソナルコンピュータの普及はなかったであろう。しかし、彼らの採用したインターフェイスが過去という歴史の重みを利用したのは事実である。インターフェイス開発者たちに敬意を惜しむつもりはないが、同時に、これらのインターフェイスにある種の歴史の呪縛が感じられるのも皮肉な事実である。

さらに、DTP という技術も、印刷の職人藝をパソコンで実現しようとしたものといえる。タイ



ブライターも印刷の組版術を実現しようとしたが、いかんせん制限が多すぎた。けれども、さすがに文明の利器であるコンピュータは印刷の組版が実現していたことを、ほとんど達成している。たとえば、タイプライターには二重引用符が一種類「"」しかなかった。タイプライターでは文字・記号の種類に制限があったからだ。しかしパソコンでは印刷術と同じように、カーリー・クォートと呼ばれる「“”と「””というデザインの二重引用符を使うことができる。しかも最近では、その存在を知らなくても、ソフトウェアが自動的に正しい引用符に変更してくれる。

また、欧文の印刷術ではダッシュが三種類あった。長さの短い方からいえば、ハイフン「-」、エヌ・ダッシュ「-」、そしてエム・ダッシュ「—」だ。タイプライターにはダッシュは一種類しかなかったが、コンピュータならば、この伝統的な三種類のダッシュを使い分けることができる。ただし、先の引用符とは違って、ソフトウェアが自動的にダッシュの長さを変更してくれないから、それぞれのダッシュの入力の方法を知らなければ、せっかくのコンピュータがタイプライターと同じになってしまう。

同様に、印刷術では、リガチャとよばれる合字がある。たとえば、伝統的な印刷術では、fとiの文字列をfiと二字に綴らずに、一文字のfiという文字を使う。タイプライターではもちろん不可能だったが、パソコンではこれも可能になった。これらの技術も、伝統的な印刷術をまねたといえるだろう。

もうひとつ、イタリック体についても指摘しておかなければならない。ふつうのタイプライターではイタリック体は印字できなかったから、イタリック体を使いたいところは、その代わりに下線を引いたものだったが、コンピュータではイタリック体を印字できるようになった。ただし注意しなければならないことは、ときにイタリック体ではなくオブリーク体と呼ぶべき字体が使われてしまうことだ。じつはイタリック体は、ローマン体を単に斜めにしたものではない。斜めにしながら、筆記体の筆致を加えたものである。それに対して、オブリーク体と本稿で呼ぶものは、ローマン体(Roman)を幾何学的にむりやり斜めにした書体である(Oblique)。だから斜めは斜めでも、真のイタリック体(Italic)とはまったく異なり、まっとうな印刷の組版ではみたことのない字体になってしまう。コンピュータは、すでに何度も指摘したように、伝統的組版術を再現しようとした技術なのだから、オブリーク体のような奇妙な書体を使ってはいけない。タイプライターによる組版術の踏襲ではなく、伝統的組版術の復活をめざすのがコンピュータなのである。マッキントッシュ・コンピュータによる組版術を論じたベストセラーのタイトルは、いみじくも『マックはタイプライターにあらず』であった。<sup>(20)</sup>

議論が少し組版のルールの方に向かってしまったが、本稿の述べたいことが明瞭になってきただろう。新しいコンピュータも、古い活版や写植が実現したことを同じように実現しようとしているのである。

## 文字コード

コンピュータを使って印刷するとき、避けることのできない問題がある。それは文字コードの問題だ。コンピュータの内部では、文字は符号化されて処理されているので、どの文字にどんな符号を割り当てるのが大きな問題なのである。文字コードをめぐる状況は変化が激しく、議論も絶えない問題なので、ここで詳しく論じることにはできないが、ごく簡単にその状況を整理して分析しておきたい。

なお、文字コードの流れを整理することは存外むずかしい。<sup>(21)</sup> その理由は、JIS の複数の規格が並行して存在して改訂され続けていたり、規格書番号が JIS 全体のグループ変えによって変更されたりしていることによる。さらに変化も早い。整理しても、すぐに時代遅れになってしまうのである。

日本における文字コードの歴史は、まず、1969年に JIS C 6220 (いわゆる JIS ローマ字カナ) が定められ、ローマ字とカナのコードが定められた。(1976年に改訂。) 次に、いよいよ漢字のコードが1978年、JIS C 6226:1978 (いわゆる旧 JIS, 78JIS) として初めて規格化され、6,349の漢字にコードが与えられた。ひらがなやカタカナなどを合わせると6,802字が規定されたことになる。この規格を改訂したのが、1983年の JIS X 0208:1983 (いわゆる新 JIS, 83JIS) で、この新 JIS は、1990年と97年の一部変更をへて、6,355の漢字を含む6,879文字のコードを定めている (いわゆる JIS208, 97JIS)。さらに2000年1月、JIS X 0213:2000 (いわゆる JIS213, 2000JIS) が制定され、JIS208の6,879文字に追加する4,344の文字が規定された。したがって現在は、JIS208と新しく追加された JIS213との二本立てで、計11,223字が規定されていることになる。ただし、この JIS213が普及して広く使われるようになるにはまだ時間がかかりそうだから、現状は JIS208が中心と考えていだろう。

国内規格の JIS に対して、国際規格には ISO 2022がある。現在、インターネットでおもに使われている規格はこの ISO 2022で、この規格に JIS208で定められた文字を含めることによって、アルファベット文字と漢字とを同時に用いることができるようになっている。

一方、アメリカのコンピュータ・メーカーが中心になって、Unicode という、世界の文字をひとつの文字セットに組み入れようとする新しい規格の開発がはじまった。1993年、その Unicode が、ISO 10646-1:1993をもとに、日本語、中国語、朝鮮語、台湾語 (正確には台湾漢字) をひとつの文字体系言語として、わずか20,902文字の枠に押しこむことにしたため、大変な騒ぎになった (Unicode1.1)。<sup>(22)</sup> 現在、この規格は Unicode 2.1 に改訂され、パーソナルコンピュータに使われはじめている。けれども、最近、約100万字分のスペースが増設され、そのうちの少なくとも65,536字に漢字を追加できるようになったので、Unicode における漢字の数の問題も解消されつつあるといえるだろう (Unicode 3.0)。

以上のような文字コードの歴史を整理することが本稿の目的ではない。重要なことは、JIS も

Unicode も容量が増加されつつあるということである。この事実も、コンピュータが活版や写植の技術に追いつこうとしていることの表れだといえるだろう。あの諸橋轍次の『大漢和辞典』（大修館書店、昭和30-35年）には、約5万字の写植文字が使われていた。<sup>(23)</sup> そう考えると、まだコンピュータは写植に追いついていない。追いつこうとするこの努力はまだ続けられるのだろう。<sup>(24)</sup>

ところで、いまでも使われている先の JIS208 はじつに悪名高い規格である。有名な例をあげれば、東京二十三区のひとつ、葛飾区が、コンピュータではふつう葛飾区と表示・印字されてしまう。正しい「葛」が使えない。外字と呼ばれる特殊な文字を使えば印字することができるが、外字にはもちろん互換性がないから、インターネット等で使うことは不可能だ。あるいは明治の文豪、森鷗外も、森鷗外と表示・印字され、正しい「鷗」を使うことができない。<sup>(25)</sup>

けれども、これらの有名な例は、見た目にも明らかなので、特に心配する必要はないだろう。多くの人が気づきながらもなかば諦めて使っている。むしろ注意しなければならないのは、異常さに気づきにくい次のような例だ。たとえば、灼熱の「灼」、ゴミ屑の「屑」、カバンの「鞆」、詮索の「詮」、灘の生一本の「灘」などである。これらの漢字は、どこがどうおかしいのかわかりにくい。すべて国語辞典に載っている正しい字体ではないのに、そうと気づきにくいのである。まさに質が悪い。<sup>(26)</sup>

活版や写植の時代には、これらの異体字は使うべきでないものとされていた。コンピュータが活版や写植の伝統を追いつめている流れのなかで、この規格はその流れに逆行しているといえる。もちろん JIS では、字体の自由度がある程度認められているから、JIS のみの罪とはいえないが、スタンダードとしての JIS の功罪は大きいといわなければならない。<sup>(27)</sup>

## 書物から電子本へ

それでは最後に書物と現在の電子本とについて考えてみたい。書物の歴史を振りかえると、現在の電子本の出現はいわば当然の流れのように見える。なぜなら、電子本のもっとも便利なのは検索・相互参照が容易なことだが、従来の書物も検索・相互参照が容易にできるように形態が改められてきた経緯があるからだ。

たとえば、ローマでは3世紀の末頃、ギリシャ文化圏では5世紀初め頃、書物の形態が、巻物のような卷子本からページをたばねた冊子本に変化した。この変化の背景には、冊子本では紙の表裏に文字が書けること、および、耐久性のある羊皮紙がパピルスの代わりに使われるようになったことなどがあるが、最大の目的は、冊子本にすることによって、検索・相互参照を容易にするためだった。その証拠に、最初に冊子本化されたものは聖書であって、文学作品などは卷子本の形態が続いていた。論ずるまでもなく、聖書は前後の相互参照が重要な書物である。<sup>(28)</sup>

あるいは12世紀頃、書物に目次や索引が付けられるようになった。この工夫が、検索や相互参照に役立つことは明かだ。イヴァン・イリチがいうように、その結果、それまでは書物の世界のな

かをいわばさまよい歩くような読みかたをされていた書物が、書物の世界のなかにいわば知識を探し求めるような読みかたをされる書物に変わったのである。<sup>(29)</sup>

このような流れを理解すると、現在もっとも電子本化されている分野が、辞書や事典であることも納得できる。これらはもっとも通読されない書物である。もっとも検索という使いかたをされる書物である。現在の電子化された辞書や事典は、3世紀以来の書物の歴史の延長にあるのだ。

また、1971年にはじまったプロジェクト・グーテンベルク（グーテンバーグ）という計画がある。日本にも同様の青空文庫という活動がある。これらは、著作権の問題がない古典や歴史文献を電子化して無料で配布しようという計画だが、これらの電子データも、未読のテキストを通読するためというよりむしろ、研究者による検索や参照を容易にするためのものといえる。

あるいは、ハイパーテキストという言葉が流行したことがある。これは、インターネットのホームページ上に使われるリンクを連想するとよくわかるのだが、文学作品などのテキストの部分部分に関連するリンクを張り、そのリンクをたどることによって、他のテキストを参照できるというものだ。構想としてはもっと雄大で、そのリンクをたどることによって、地球上のあらゆるテキストを網羅的にたどることができるようなリンクの網の目を作ろうというものだった。<sup>(30)</sup> このハイパーテキストの概念も、じつは伝統的な脚注や校注からヒントをえたものであって、書物の検索・相互参照の容易化という歴史のコンテキストのなかに位置づけることができる。もちろん、コンピュータを使ったリンクでは、脚注とはちがって、画像や音声などと連結することができる。連結の連鎖も可能である。けれども歴史の流れをふまえると、ハイパーテキストはコンピュータの力を使って、検索・相互参照を壮大にしようとしたものであると考えられるだろう。

以上のような書物の電子化の流れをみると、本というのは、検索・相互参照が容易になるような形態にあらためられてきたといえる。逆にいえば、検索・相互参照を飛躍的に容易にする電子本という形式には、この流れにしたがった需要や将来性があるといえそうだ。

けれども、電子本は、検索・相互参照の容易化という点で過去の歴史の流れにしたがった産物であるだけでなく、過去を模倣するために新しい技術を使っているという点でも歴史の流れにしたがった産物である。なぜなら、辞書・事典以外の電子本の多くは、じっさいの書物のページのコピーをそっくりそのまま電子化して表示したものであったり、コンピュータの画面上で書物のページをめくるような仕掛けになっていたり、まさにコンピュータを使って書物を再現しているからだ。コンピュータが書物の形態を模倣しているのである。

このような現状では、書物は変わらないのではないだろうか。電子本は書物に取ってかわらないのではないだろうか。それが歴史の教訓だ。歴史を振りかえってわかったように、新しい技術は書物を変えなかった。むしろ、書物を変えたものは、先にあげた卷子本から冊子本の変化であったり、グーテンベルクの数十年後、写本風のゴシック体から読みやすいローマン体へ書体を変えたフランスのニコラ・ジャンソン（ニコラス・ジェンソン）の功績であったり、あるいは同じ頃、書物を小

型化したイタリアのアルド・マヌツィオ（アルドゥス・マヌチウス）の活躍であった。<sup>(31)</sup> ジャンソンやマヌツィオの業績は、技術史的には小さな業績かもしれないが、書物の歴史からみると、書物の形態を変えるという大きな業績であった。活版も写植もタイプライターも DTP も、書物そのものを変えたわけではないのである。

もちろん本稿は電子本の未来を否定しているわけではない。新刊の書物の多くが電子本になる日がいつか来るかもしれないと考えられる。しかし、それは電子本が従来の書物という過去の頸木<sup>くびき</sup>から解かれたときはじめて起こりうることだろう。電子本がまったく新しい形態の本になったときのことだろう。

それではどのような新しい形態があるのだろうか。たとえば、現在の書物の多くは、日本語で約 9 ポイント（約13級）、英語で約10ポイントの大きさの文字が使われている。一方、パソコンの画面でメールなどを読むときには、12ポイントや14ポイントが、あるいはプリンターに出力して印字するときには、10.5ポイントや12ポイントが使われている。そこで電子本でも12ポイントや14ポイントが表示に使われていることが多いようだ。けれども、それは過去の遺産を引きずっているのではないだろうか。もしかすると電子本には20ポイントくらいの大きな文字がいいのかもしれない。書物では文字が大きいと、ページ数が増えて分厚くなってしまいが、電子本ならば、文字が大きくても不便にならないからである。

あるいは、現在の日本の書物の多くは縦書きのため、日本の電子本も縦書きを再現しようとしているが、それも模倣すべきことなのかかわからない。同様に、現在の書物では一ページに20行くらい印刷されているが、来るべき電子本ではどのようなページレイアウトがいいのか、それも試行錯誤する必要がある。いや、そもそもページとよぶべきものが必要かどうかともわからない。街角にある電光掲示板ニュースのように、一行の文字表示が自動的に動く仕掛けがいいのかもしれない。

いずれにせよ、現在の書物の概念から自由になったとき、本当の電子本が生まれると思われる。逆にいえば、現在の書物の概念から自由にならなければ、電子本は定着しないのではないだろうか。1993年に NEC が売りだした「デジタルブック」と同じように失敗に終わるだろう。

写本をまねた初期印刊本が、写本的書物から脱皮するには約50年から100年かかったが、電子本がこれまでの書物から離れるのにはどれくらいかかるだろうか。技術革新の上昇曲線が中世とはまったく違うので、それよりも短いだろうとも考えられる。一方、写本は一部の人にしかなじみの薄いものであったから、その他多数の人々が新しい形態の書物を受け入れることは容易であったが、ほとんどすべての人々に知られている現在の書物の形態をほとんどすべての人々が捨てざるまでにははるかに時間がかかる、と考えることもできる。時間の予想は難しいといわざるをえない。

## おわりに

最後にもうひとつだけ付けくわえよう。本稿では読まれるものとしての書物を取りあげたが、じつは書物は読むためだけのものではない。たとえば、読まずに装飾品にもなる。そろいの百科事典や文学全集が、リビングルームの重要な小道具であった時代があった。アメリカの服飾デザイナー、ラルフ・ローレンのブティックでは、アメリカでも日本でも古色蒼然とした革装の書物がインテリアの小物として使われている。このように読書以外にも書物の使いかたがあるのだ。

あるいは、同じテキストが、安価な文庫本にもなれば、豪華な特装本にもなる。これも、単に読書されるものとしての書物という概念では説明できない現象だ。たとえばロングフェローという19世紀アメリカのベストセラー詩人は、自分の詩をのちに<sup>コレクション</sup>著作集に収めるとき、意識的に廉価本と豪華本とを作って読者の要求を満たした。1845年、ロングフェローは、多数の挿画を用いた3ドル50セントの豪華版を刊行し、その翌年にはそのわずか七分の一である50セントという価格でペーパーバック版の著作集を出版した。<sup>(32)</sup> 書物というのは、このように単なるテキストの集合ではなく、複雑な機能と意味とをもったものなのである。

未来の電子本において、そのような複雑な機能や意味はどのようなになるのだろうか。きっと機能や意味も、過去のを踏襲しない、新しい複雑な機能や意味をもつことになるのだろう。つまり電子本は、読むという使いかた以外の点でも新しいものにならなければ、従来の書物に取ってかわることができないのではないだろうか。本稿の結論の結論をいえば、以上ようになる。

## 注

- (1) 新書版『漱石全集』第一巻，岩波書店，昭和31年，78-79頁。
- (2) Rolf Engelsing, "Die Perioden der Lesergeschichte in der Neuzeit," in *Zur Sozialgeschichte Deutscher Mittel- und Unterschichten* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1978), pp. 112-54. および荒井訓「18世紀末のドイツにおける『読書革命』をめぐる」『言語と文化』第8号，平成9年12月，1-25頁参照。
- (3) 『出版年鑑』2001年版，第一巻，出版ニュース社，平成13年，333頁。『全国書店新聞』平成13年2月7日，1頁。なお，新刊点数に関して，『出版年鑑』と『全国書店新聞』では，若干，数字が異なっている。
- (4) 『全国書店新聞』平成13年8月1日，1頁。
- (5) ノラ・エフロン監督による1998年の映画 *You've Got Mail* は，小さな書店を経営するヒロインと，その近所に大型書店をオープンするチェーン店の御曹司が出合う物語で，アメリカの大型書店ブームを背景にしている。ノラ・エフロン『ユー・ガット・メール』ワーナー・ホーム・ビデオ，平成10年。
- (6) 『新文化』平成10年8月20日，2頁。
- (7) 湯浅俊彦『デジタル時代の出版メディア』ポット出版，平成12年，95頁。

- (8) Sven Birkerts, *The Gutenberg Elegies* (New York: Ballantine Books, 1995).
- (9) Richard A. Lanham, *The Electric Word* (Chicago: The University of Chicago Press, 1993).
- (10) 津野海太郎『本はどのように消えてゆくのか』晶文社, 平成8年。そのほか, 書物の未来に関しては, ロジェ・シャルチエ他『国際円卓議論・本の未来』大日本印刷, 平成11年がある。一定の結論には到達しなかったが, ロジェ・シャルチエが参加して驚かされた。しかもシャルチエのエッセイのいくつかは, 宮下志朗が翻訳を担当するという豪華な顔合わせだ。
- (11) 高宮利行・原田範行『本と人の歴史事典』柏書房, 1997年, 90頁。
- (12) リュシアン・フェーヴル, アンリ＝ジャン・マルタン『書物の出現』上巻, 関根素子他訳, 筑摩書房, 昭和60年, 161-65頁。
- (13) Curt Ferdinand Bühler, *The Fifteenth Century Book: The Scribes, the Printers, the Decorators* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1960).
- (14) Elizabeth L. Eisenstein, *The Printing Press as an Agent of Change* (New York: Cambridge University Press, 1979).
- (15) ヘルムート・ブレッサー『書物の本』轡田収訳, 法政大学出版局, 昭和48年, 226頁。
- (16) 大日本印刷株式会社編『印刷のおはなし』改訂版, 日本規格協会, 平成13年, 55頁。
- (17) 田中薫は編集者として, ホットメタル(活版)からコールドタイプ(写植)への変化を体験している。田中薫『書籍と印刷の話』燃焼社, 平成12年, 13-24頁。
- (18) フリードリッヒ・キトラ『グラモフォン・フィルム・タイプライター』石光泰夫他訳, 筑摩書房, 平成11年, 281-368頁。
- (19) *Hart's Rules for Composition and Readers*, 39th ed. (Oxford: Oxford University Press, 1983); *The Chicago Manual of Style*, 14th ed. (Chicago: The University of Chicago Press, 1993); and *MLA Handbook*, 5th ed. (New York: Modern Language Association of America, 1999).
- (20) Robin Williams, *The Mac Is Not a Typewriter* (Berkeley: Peachpit Press, 1990).
- (21) たとえば, 文字コードの最新の状況を整理したもっとも便利な清水哲朗『文字コードのすべて』日本実業出版社, 平成13年と, 同じく新しくて簡便な加藤弘一『電腦社会の日本語』文春新書, 平成12年とのあいだにも, 年代や文字数の異同がみられ, 驚かされる。なお, JISの規格書原典は日本規格協会から出版されている。たとえば『情報交換用漢字符合系 JIS C 6226:1978』昭和53年, および『情報交換用漢字符合系 JIS X 0208:1983』昭和58年参照。また, JIS規格を抄録した『JISハンドブック2002年版64情報技術 I』日本規格協会, 平成14年もある。
- (22) 日本では Unicode をめぐる問題が表面化して, いっそう漢字コードの問題が注目されるようになったようだ。当初は, Unicode 対 TRON コードという図式の議論が多かったが, 次第に JIS コード全体の問題点が議論されるようになり, 作家の発言も増えた。作家や文学者の主張については, たとえば平凡社編『電腦文化と漢字のゆくえ』平凡社, 平成10年参照。

- (23) 『大漢和』のために五万字あまりの写植文字をデザインした石井茂吉については、たとえば紀田順一郎『日本語大博物館』ジャストシステム、平成6年、225-43頁、および、『これが五万字』大修館書店、昭和61年を参照。
- (24) なお本文で論じることができなかったが、コンピュータで使える漢字の文字数を増やそうとする、下からの動きも活発である。たとえば、今昔文字鏡というソフトウェアを用いれば、約9万字の文字（うち漢字は約8万字）を使うことができる。このようなソフトウェアが、いつの日かデ・ファクト・スタンダードになって、JISやUnicordのような上からのスタンダードを凌駕するようになればおもしろい。
- (25) この新JISと旧JISが現場にもたらした混乱の一例については、中西秀彦『活字が消えた日』晶文社、平成6年、130-135頁参照。
- (26) 正しくは、それぞれ「灼」「屑」「鞆」「詮」「灘」。
- (27) JISは包摂という概念を使っていて、たとえば内田百閒の「聞」の字は「聞」という文字に包摂されているとしている。すなわち、規格としての「聞」という文字のデザインは、代表的なものとして仮に選ばれたにすぎず、「聞」に代表させることも可能であって、それはメーカーの自由である、ということになっている。
- (28) F. G. ケニオン『古代の書物』高津春繁訳、岩波書店、昭和28年、130頁。
- (29) Ivan Illich, *In the Vineyard of the Text: A Commentary to Hugh's Didascalicon* (Chicago: The University of Chicago Press, 1993).
- (30) ハイパーテキストやそれを唱えたテッド・ネルソンについては、たとえば津野海太郎『本とコンピューター』晶文社、平成5年、198-244頁参照。
- (31) ジャンソンは古代のテキストを理想として、美しく読みやすいローマン体を鑄造した。ウィリアム・モリスがジャンソンを熱烈に敬愛したことは有名である。ジャンソンについては、たとえば、Philip Gaskell, *A New Introduction to Bibliography* (New Castle, Delaware: Oak Knoll Press, 1995; 1st ed. 1972), pp. 20-21; and Martin Lowry, *Nicholas Jenson and the Rise of Venetian Publishing in Renaissance Europe* (Oxford: Blackwell, 1991) 参照。マヌツィオによる書物の小型化によって、これまでの聖職者や修道士による静的な読書から、書物を携帯する市民による動的な読書になった。マヌツィオについてはたとえば、雪嶋宏一「アルドゥスの印刷出版書誌 — 書誌論ノート(1)」『文献探索1998』平成11年2月、419-24頁; and S. H. Steinberg, *Five Hundred Years of Printing* (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1955), pp. 55-57参照。
- (32) William Charvat, "Longfellow's Income," in *The Profession of Authorship in America 1800-1870* (New York: Columbia University Press, 1992; 1st ed. 1968), p. 162.